

若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

堀田 美保 (近畿大学文芸学部)

Estimated social opinions regarding the advantage and the disadvantage of young generation and parent generation

Miho HOTTA (*Department of Arts and Literature, Kinki University*)

University students and parents were asked to estimate the distributions of social opinions about the advantage of young generation and parent generation, separately for youth and parent populations. The respondents were also asked to describe their own opinions on the issue. First, no generation-gap was found in the estimates. The respondents estimated that the parent generation is generally considered more disadvantaged than is the young generation. This tendency was more salient in the students' estimates. Second, there were differences between the students and the parents in their own opinions. The parents rated the two generations as equally advantaged. On the other hand, the larger number of the students considered that the parent generation is more disadvantaged than is their own generation. Finally, the different time perspectives were inferred from the descriptions about the generation advantages given by the students and those by the parents. This seemed related to the generation differences in their own opinions as well as in their estimates of the distributions of social opinions.

Key words: social opinion, distribution estimate, generation-gap, fairness, time perspective
キーワード: 社会意見、分布推定、世代間格差、公正さ、時間的展望

1960年代における若者によるサブカルチャーの台頭、特にそれが大人社会にプロテストする「対抗文化」として現れたことにより、若者の社会的影響力を無視することはできなくなった。それに伴い、心理学や社会学に対して、若者の「不可解な」行動を説明・理解する要請が浮上し、同時にそれは「世代」への関心も高めた。

社会学的研究では、親から子への影響、世代から世代への文化継承という連続性への関心に加え、親子の違いやズレを問題とする家族内での断絶に目が向けられるようになった。また、対抗文化の担い手としての若者に焦点を当てたいわゆる「若者論」という分野が登場することで、世代間での不連続性に焦点が当てられるようになった。そこでは「団塊の世代」「新人類」「団塊ジュニア」など、それぞれの時代における「若者」の新しい行動・思考パターンが分析され、異なる時間を生きたグループとして世代が語られる(たとえば栗原, 1989)。また、年齢を独立変数的に扱い、価値観や行動パターンといった従属変数における差異を検討する研究は枚挙にいとまがないが、それらは異なる発達段階(青年期・中年期・老年期など)に位置する者としての世代の特性や問題を比較検討する発達心理学的研究といえる(たとえば岡本, 1995; 古市, 1990を参照)。

これらは異なる視点から世代を扱っている研究ではあるが、そこには「世代間では行動・認知・価値観が本質として異なる」という仮定が共通しているように思える。

巷間でも、世代間に価値観や意見の対立が見られるのは当然のことだとする風潮が広まっており、「ジェネレーションギャップ」はひとつの暗黙の信念と考えられるのではないだろうか。

これに対して「世代間格差は現実のものか」を改めて問う研究もあり、世代間格差という常識は疑わしいとする見解も提出された(西平, 1976; Troll & Bengtson, 1978)。その後、世代間格差は現実かもしれないし、そうでないかもしれないが、世代間での格差が認知上過大視されることにより、「ギャップ感」を生み出しているとして、現実の格差そのものとは別に、格差の認知を問題とする研究が現れる。誰が、なぜギャップを感じるのかという問題意識が生まれた。

人類学者の祖父江(1977)は、上の世代から下の世代をみたときに、そのギャップが特に過大視され、世代の断絶が認識されるとした。徳田(1978)はこの見解の実証的検証を試み、親子間において、上から見る世代差(親が推測する子どもの意見と自己の意見との差異)と下から見る世代差(子どもが推測する親の意見と自己の意見との差異)との大きさを比較した。その結果、親による子どもの意見の推測において誤差が多く、世代間の差異が過小推定されていたのに対して、子どもは世代間格差を過大視する傾向にあり、「下からの世代差」がより大きいことが見いだされた。

Bengtson & Kuypers (1971) も世代間格差の認識は

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

「上から」よりも「下から」見たときに大きいと主張する。その理由は各世代が持つ心理社会的欲求に求められる。年長世代は自分自身の存在意義を失うかもしれないといった喪失神話にとり憑かれ不安を感じ、自分たちの価値や制度を次世代に残したいという欲求が生じる。そのため世代間の差異を最小限にしか認知せず、世代間での継承という側面に関心を抱く。これに対して、若者世代は自らの価値や制度を新たに創り出すことにより、アイデンティティを早く確立したいという欲求を持っており、そのため世代間の差異を最大限に見積もり、差異を誇張して認知するあるいは差異を作り上げる傾向にある。これが世代間格差認知を説明する発達投企理論 (Developmental Stake Theory) である。Acock & Bengtson (1980) は、子どもによる親意見の推測に誤差が多く、世代間格差の認識は子どもの頭の中にあるという結果を報告している。

これらの研究は、親と子が実際に持っている意見ではなく、互いが推測した意見が意味を持つとし、格差の真偽の検討という従来の研究とは異なる視点から世代格差について考察するものである。しかし、その分析は主に親子の繋がりに焦点が置かれ、家族内というよりミクロレベルでの世代格差認識 (Bengtson & Cutler, 1976) の問題に留まっている。世代間格差の認識を一般に流布している信念の問題として捉え、親世代一般と子世代一般がどのような意見・価値観を持っているのかを検討することは重要だと思われる。たとえば「今どきの若者は」で始まる類の否定的意見を、多数者が共有している一般的意見だと認識することで、若者が「どうせそう思われている」「理解されていない」といった不満感や諦めを抱き、家族外の広い範囲で世代間相互作用を回避したり、対立的姿勢で他世代と関わり、結果として世代間葛藤を生む可能性も考えられる。また、多数者の意見だという認知は、世代間格差に社会的現実感を与えるかもしれない。社会意見分布の認知は個人の価値観や行動のみならず、社会の動向をも規定する重要な要因である (池田・村田, 1991)。そこで、本稿では、親子関係を越えたより一般的なカテゴリーである世代を考え、世代間格差に関する社会意見認知について考察を行うことを目的とした。

社会意見認知に関してはいくつかの内集団・外集団効果が報告されている。集団間格差が過大視される傾向や現実には存在しない集団間差が仮定される傾向 (e.g., Krueger, 1992; Rothbart & John, 1993) である。また、フェアネスや損得に関する判断にはエスノセントリックなバイアスが見られ (Boldizar & Messick, 1988)、集団間での損得の比較からくる相対的剝奪感が内集団ひいきや社会的葛藤の生起にとって鍵であるとされている (Brewer, 1979; Walker & Pettigrew, 1984)。年長世代

と若者世代を「内集団-外集団」として捉えることで、これらの知見は世代間格差の問題を考える上で有用となる。

堀田 (1996a, 1996b) は、性別をカテゴリーとして、それぞれのカテゴリー (「男であること」「女であること」) の損得について内集団 (同性) 意見と外集団 (異性) 意見を推定させた。その結果、回答者自身の性を得得であると考えられる者は内集団よりも外集団により多いと推定された。つまり、「自分たちが不利な立場にいることが異性からは過小評価されている」あるいは「自分たちは得だと過大評価されている」という推定であり、外集団による内集団についての評価にはいわゆる「隣の芝生」的見方があると推定された。しかも、そのような集団間格差は過大視された。このような認知傾向が一般的な内集団-外集団効果であるとすれば、世代をカテゴリーとして用いたときには、若者は「親世代は自分たちの世代を得得だと思っているだろう」、親は「若者たちは私たちが得だと思っているだろう」と推測し、世代間での意見格差が推定されることが予測される。

また、社会意見認知は認知者自身がどのような意見を持っているかによって異なると思われる。たとえば自分と同じ意見を持つ人の割合を過大推定する傾向は頻りに報告されており、「合意性の錯誤 (false consensus (FC)) 効果」と呼ばれる (Ross, Greene, & House, 1977)。FC効果は認知的要因と動機的要因が絡み合ったものであるが、中でも類似した他者との選択的接触という要因が注目されている (Marks & Miller, 1987)。類似した他者との選択的接触により、自分と似た人々の意見や行動を思い浮かべやすいため過大推定すると説明される (Bosveld, Koomen, & van der Pligt, 1994)。これを集団間という文脈で考えた場合、あるカテゴリーに関して自己と同類である内集団を対象としたときに FC 効果がより顕著に現れることが予想される。その結果、内集団と外集団に対する推定に差異が生じる可能性もある。

本稿では、「親世代」と「若者世代」一般がどのような意見を持っていると認識されているのか、特に世代の損得という問題に関する社会意見の認知について分析を加えた。

方 法

手続きおよび回答者 近畿大学文芸学部の大学生 327 名と同学部に所属している別の学生の保護者 327 名に対して質問紙を郵送した¹⁾。回答者は学生 94 名、保護者 130 名、回収率はそれぞれ 28.7%、39.8% であった。記入漏れなどの理由でデータを削除し、学生 85 名、保

1) 調査には、結婚、就業と家事など他の問題についても社会意見の推定を求める設問が含まれていたが、本稿では調査の一部についての分析結果を報告する。

護者 113 名の回答を分析に用いた。調査時点における分析対象者の年齢分布は、学生では 19 歳が 16.5%、20 歳が 61.2%、21 歳以上が 22.4% ($M=20.1$)、保護者では 46 歳未満が 8.9%、46 歳以上 51 歳未満が 61.1%、51 歳以上が 30.1% ($M=49.2$) であった。

質問内容 本稿では以下の質問に対する回答を分析対象とした。まず、社会意見推定課題として、今の若者世代とその親の世代の損得それぞれについて、「世間の人々の意見はどのように分かれていますか」と尋ねた。大学生に対しては「自分の世代」と自分の「親の世代」、保護者に対しては「自分の世代」と自分の「子の世代」と表現した。意見項目として、「得である」「損である」「どちらともいえない」の 3 つを呈示し、各々に対してそのような意見を持っているであろう人の比率 (%) を推定するよう求めた。その際、世代をカテゴリーとした 2 つの集団を設定した。学生に対しては「自己の世代」と「親の世代」を、保護者に対しては「自己の世代」と「子の世代」を想定させ、それぞれのターゲット集団内の意見分布を推定するよう求めた。つまり、各回答者は、「若者世代の損得」と「親世代の損得」という 2 つのテーマについて、2 つの世代集団における意見分布を別々に推定したことになる。4 種類の順序で (2 テーマ \times 2 推定ターゲット集団) 推定課題を並べ、いずれかを各回答者にランダムに割り当てた。

また、回答者自身の意見として、「若者世代」と「親世代」それぞれの損得について「非常に損である (1)」「損である (2)」「どちらともいえない (3)」「得である (4)」「非常に得である (5)」の 5 段階で評定を求めた。また、その評定に対して、なぜそう思うのか、自由記述形式で回答するよう求めた。記述欄としてそれぞれ B5 横書きで 3 行設けた。

結 果

社会意見推定 社会意見推定を分析するにあたり、「得である」「損である」という意見項目に対する推定値を用いて、相対的有利性指標 (Relative Advantage Index) を回答者ごとに算出した。

$$RAI_i = (a_i - d_i) / (a_i + d_i)$$

a_i , d_i はそれぞれ、回答者 i が「得である」「損である」という意見を持つ者の比率として与えた推定値である。 $RAI_i + 1.0$ に近づくほど「得」という意見が相対的に多いと推定されたことを示す。

RAI に対して 2 (回答者の世代) \times 2 (推定ターゲット集団) \times 2 (意見推定のテーマ) の分散分析を行った²⁾。

2) 結果報告の簡潔化のために RAI を用いた。「得である」「損である」の意見項目推定に対して個別に分散分析を行った結果においても、同様に回答者の世代とテーマ

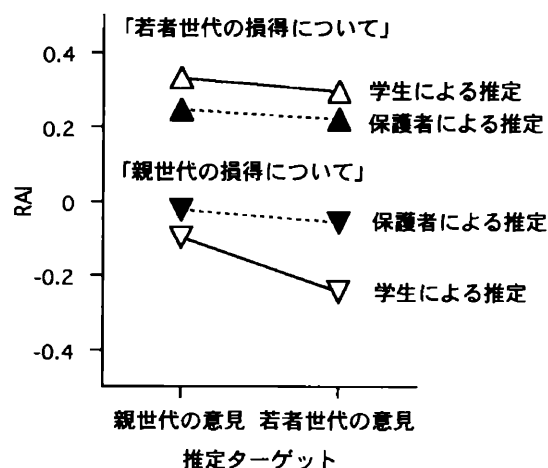


Fig. 1 社会意見推定における RAI 平均値

Table 1 自己意見分布

| 評定 | 比率 (%) | | | | | RAI |
|-----------|--------|------|-------|------|------|-------|
| | 非常に損 | 損 | どちらとも | 得 | 非常に得 | |
| 「親世代」の損得 | | | | | | |
| 保護者 | 0.0 | 23.0 | 52.2 | 24.8 | 0.0 | 0.04 |
| 学生 | 1.2 | 37.6 | 51.8 | 9.4 | 0.0 | -0.61 |
| 「若者世代」の損得 | | | | | | |
| 保護者 | 0.9 | 28.3 | 45.1 | 23.9 | 1.8 | -0.06 |
| 学生 | 0.0 | 11.8 | 48.2 | 37.6 | 2.4 | 0.54 |

RAI の平均値を Fig. 1 に示す。回答者の世代とテーマの交互作用が有意で ($F(1, 196)=8.58, p<.01$)、保護者も学生も「若者世代」に比べて「親世代」について「損」という意見が多いと推定したが (保護者 $M=0.23$ vs. -0.04 , $F(1, 112)=28.01, p<.01$; 学生 $M=0.31$ vs. -0.17 , $F(1, 84)=106.92, p<.01$)、保護者に比べ、学生が「親世代」は「損」という意見が多いと推定した ($F(1, 196)=7.93, p<.01$)。つまり、推定には世代間での意見格差は認められず、「若者世代」より「親世代」の方が損であるというのが世代に関わらず一般的意見であると推定され、その傾向は学生の推定においてより顕著であったといえる。

回答者の自己意見 次に、「親世代」「若者世代」の損得に関する回答者による自己意見評定について分析した。学生・保護者による意見の分布を Table 1 に示す。「親世代」については、学生よりも保護者自身において「得」という意見が多く ($\chi^2(3)=11.18, p<.05$)、逆に「若者世代」については保護者よりも学生自身において「得」という意見が多い ($\chi^2(4)=10.28, p<.05$)。また、

の交互作用が有意であった (それぞれ $F(1, 196)=9.00, p<.01$; $5.41, p<.05$)。

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

「親世代」と「若者世代」との相対的な損得という点では、保護者では「親世代」がより得であるとする者は34名、より損とする者は31名、同程度とする者は48名であり、符号検定によると差は認められない($z = 0.25$)。それに対して、学生では「親世代」がより得であるとする者は13名、より損であるとする者は44名、同程度とする者が28名であり、「親世代」がより損であるとする者が有意に多かった($z = 3.97, p < .01$)。すなわち、保護者では2世代の損得に差がないとする評定が多いのに対して、学生では、自分たちの世代は得であり親の世代は損であるという評定が多いという結果となった。

社会意見推定と自己意見との関連性 まず、社会意見推定におけるFC効果について分析を行った。各推定意見ごとに回答者を「該当意見保持者」と「その他の意見保持者」とに分類し、推定比率の平均値を両群で比較した。Table 2 に示されるように、保護者では1ケースを除き全ての推定意見項目において、該当項目を自己意見として持つ者はそうでない者よりも推定値を有意に高く見積もる傾向にあり、FC効果が認められた。一方、学生

では、FC効果は、「若者世代は得」という意見を持つ者による推定と「親世代は損」あるいは「どちらともいえない」という意見を持つ者による親世代意見の推定に限られた。

次に、回答者の自己意見評定から得られた分布と推定分布との比較を行うことにより、社会意見推定をさらに分析した³⁾。比較のために、自己意見分布における「非常に得/損である」という意見をそれぞれ「得/損である」と合わせ3項目とした。それらの項目の比率から算出したRAI値(Table 1の最右列参照)を仮説値とし、推定値を1標本 t 検定によって分析した。正の t 値は推定値が自己意見分布における値を上回り、負値は下回ったことを示す。Table 3の「RAIの比較」に示されるように、「親世代」の損得については若者世代意見の推定において、「若者世代」の損得については親世代意見の推定において t 値が正でかつ有意であり、保護者・学生ともに、これらの項目に対する推定のRAI平均値は自己意見分布に比べ有意に高いといえる。逆に、「若者世代」の損得についての若者世代意見の推定では保護者と学生において、また「親世代」の損得について

Table 2 自己意見別推定比率(%)の平均値：FC効果の検証

| 推定意見項目 | 親世代の意見推定 | | | 若者世代の意見推定 | | |
|---------------------|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|--------|
| | 該当意見保持者 | 他の意見保持者 | z 値 | 該当意見保持者 | 他の意見保持者 | z 値 |
| 「親世代」の損得 「損である」 | 52.9 (26) | 31.0 (87) | 5.86** | 47.4 (26) | 32.8 (87) | 2.80** |
| | 48.8 (33) | 34.9 (52) | 3.40** | 47.9 (33) | 42.0 (52) | 1.58 |
| 「どちらとも」 | 35.0 (59) | 23.2 (54) | 3.04** | 36.7 (59) | 26.8 (54) | 2.50* |
| | 32.2 (44) | 22.5 (41) | 2.63* | 30.9 (44) | 28.6 (41) | 0.60 |
| 「得である」 | 50.5 (28) | 28.9 (85) | 5.24** | 36.4 (28) | 30.0 (85) | 1.54 |
| | 37.4 (8) | 31.4 (77) | 0.76 | 30.3 (8) | 25.4 (77) | 0.61 |
| 「若者世代」の損得 「損である」 | 35.0 (33) | 21.9 (80) | 3.39** | 38.2 (33) | 23.2 (80) | 4.04** |
| | 23.0 (10) | 25.4 (75) | 0.47 | 26.7 (10) | 26.5 (75) | 0.04 |
| 「どちらとも」 | 31.1 (51) | 24.0 (62) | 1.98* | 31.0 (51) | 23.7 (62) | 2.17* |
| | 25.9 (41) | 19.5 (44) | 1.77 | 26.1 (41) | 20.1 (44) | 1.64 |
| 「得である」 | 66.4 (29) | 39.6 (84) | 6.05** | 56.7 (29) | 40.5 (84) | 3.98** |
| | 57.4 (34) | 48.3 (51) | 2.34* | 57.6 (34) | 45.4 (51) | 3.13** |

上段は保護者、下段は学生：** $p < .01$, * $p < .05$. 括弧内は n

3) 本稿の調査対象者は特定の大学への所属者およびその保護者であり、さらに調査回収率が比較的低い値であったことを考えると、本サンプルから得られた自己意見分布を、「世間一般」の意見分布として、比較に用いることには慎重であらねばならない。しかし、より

代表性の高いサンプルを用いた「世代の損得」に関するデータが見受けられないため、ここでは分布推定の傾向を探るための補助的情報として自己意見分布との比較結果の報告を行うこととする。

Table 3 自己意見と社会意見推定との比較結果

| 推定ターゲット | RAIの比較 | | 意見格差の比較 | | |
|-----------|------------------|-------------------|------------|-------------|------|
| | 親世代意見 <i>t</i> 値 | 若者世代意見 <i>t</i> 値 | 推定差の信頼区間 | 自己意見分布における差 | |
| 「親世代」の損得 | | | | | |
| 保護者 | -1.49 | 13.56** | -0.07~0.14 | < | 0.65 |
| 学生 | -3.01** | 8.58** | 0.03~0.27 | < | 0.65 |
| 「若者世代」の損得 | | | | | |
| 保護者 | 6.72** | -7.54** | -0.06~0.12 | < | 0.60 |
| 学生 | 10.35** | -6.27** | -0.06~0.14 | < | 0.60 |

註) ** $p < .01$, * $p < .05$

の親世代の意見推定では学生において、*t* 値は負で有意となっており、推定値は自己意見分布における比率より低い。

さらに、親世代意見と若者世代意見の格差について推定分布と自己意見分布との比較を行った。推定値から信頼区間 ($\alpha = .05$) を求め、それを自己意見分布における世代間格差と比較した。結果を Table 3 の「意見格差の比較」に示す。たとえば「親世代」の損得に関する意見分布の RAI 値は Table 1 に示したように、保護者で 0.04、学生で -0.61 であり、自己意見分布におけるその差は 0.65 である。一方、推定平均の差の信頼区間の上限は保護者、学生においてそれぞれ 0.14、0.27 であり (Table 3)、いずれも先の自己意見分布における差である 0.65 を下回っている。同様の傾向が「若者世代」の損得にも見られる。すなわち、推定分布における世代間格差は自己意見分布におけるそれよりも小さかったといえる。

以上の結果をまとめると、推定には世代間格差は認められず、「若者世代」より「親世代」に関して「損」という意見が一般に多いと推定された。この傾向は学生による推定でより顕著であった。第2に、自己意見には世代差が見られ、保護者では「自世代」と「若者世代」の損得に関して自己意見分布に差はなかった。一方、学生には「親世代は損」「自世代は得」とする者が多く、自世代は親世代より得だとする意見が多かった。保護者・学生ともに相手の世代を「損である」とする者が推定以上に多かった。第3に、一般的に FC 効果が認められた。ただし、「親世代」については「得」、「若者世代」については「損」あるいは「どちらともいえない」と評定した学生では、FC 効果は認められなかった。

世代の損得評定の理由記述の分析 先述のように自己意見分布では保護者と学生で異なる傾向が見られたわけだが、その背景を探るために、世代の損得評定に対して回答者が示した理由記述を分析した。記述内容をいくつかのカテゴリーに分類し、それぞれの例を示したものを付録として示す。紙幅の関係上、理由記述については、以

下の2点に関して行った分析結果に限定して報告を行うこととする。(1) 損得評定の際の比較対象、つまり誰かと比較しての損得であることについて言及しているか、その場合の比較対象は誰か、(2) 損得評定の理由として言及された事象の時制およびその評価、つまりいつのことに言及しており、それは肯定的なのか否定的なのか、である。

まず、「親世代」の損得評定の理由において、比較対象として別の世代に言及している回答者の比率は、保護者、学生でそれぞれ 20.6%、26.3% と同程度である。しかし、学生の場合「昔からの古い考えにとらわれていないから (得。以下括弧内に「得」「損」など略して評定を示す)」とした1名を除いて、全員が、たとえば「現在と比べて色々な面で遅れていたと思うが、まだ今の世の中よりも荒んでいなかったと思うから (どちらとも)」「今の私たちほど就職に苦労せずにすんだ (得)」など、今の自分たちとの比較、つまり「親世代」とその「下」世代との比較であった。一方、保護者の場合、自分たちの世代の損得評定の理由において、自分の子の世代との比較と自分の親の世代との比較、つまり自己の「下」と「上」の両方向との比較が見られた。「私は戦後生まれなのでわりあい豊かな生活をしてきた。両親から戦争の話を良く聞いたが、とても大変なので (得)」「大正・明治時代の女性達の様子が古いならわし等にならない所 (得)」など、他世代との比較に言及した保護者のうち 57.1% は「上」の世代との比較であった。

「若者世代」の損得についての評定理由では、保護者は「私達の世代の若い時代を考えれば隔世の感がある (非常に得)」など、自己の世代との比較をする者が 9.6% であるのに対して、学生は「親世代」と比較する者が 22.4% とより多い。保護者、学生とも今の「若者世代」よりさらに「下」との比較について述べた者はなく、また「親世代」の損得において見られたほどには他の世代との比較はない。

このような比較対象への言及の違いは、保護者が自分たちの世代を「上」の世代と比較して自分たちは「得で

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

Table 4 世代の損得評定理由における記述の時制・評価分類 (%)

| 時制 評価 | 過去 | | | 現在 | | | 将来 | | | 特定不可 | | |
|-----------|------|------|-----|------|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|
| | + | - | ? | + | - | ? | + | - | ? | + | - | ? |
| 「親世代」の損得 | | | | | | | | | | | | |
| 保護者 (102) | 43.1 | 28.4 | 0.0 | 15.7 | 14.7 | 0.0 | 3.9 | 12.7 | 0.0 | 2.9 | 4.9 | 13.7 |
| 学生 (80) | 46.3 | 70.0 | 0.0 | 0.0 | 8.8 | 0.0 | 3.8 | 0.0 | 0.0 | 3.8 | 6.3 | 6.3 |
| 「若者世代」の損得 | | | | | | | | | | | | |
| 保護者 (104) | 5.8 | 8.7 | 0.0 | 47.1 | 41.3 | 0.0 | 4.8 | 25.0 | 0.0 | 1.0 | 0.0 | 4.8 |
| 学生 (85) | 4.7 | 0.0 | 0.0 | 78.8 | 51.8 | 0.0 | 1.2 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 5.9 |

註：括弧内の数字は理由を記述した者の総数

ある」と評定することにつながり、学生に比べ「得」という意見が多い理由の1つと考えられる。また、「若者世代」について「上」と比較する者が学生により多いことが、保護者に比べ、学生自身において今の「若者世代」は「得」とする評定が多いという結果と関連しているであろう。

第2の分析の視点として取りあげたのが、理由として述べられている事象の時制である。記述を過去、現在、将来、特定不可に分類し、さらにこれらを肯定的とされているもの(+)、否定的とされているもの(-)、特定不可能なもの(?)に分類した。Table 4 に言及者の比率を示す。

保護者による自分たちの世代に関する記述には、過去から現在までの時間を過程としてとらえた、いわば現在完了形が目立った。これは過去として分類した。「幼時とはいえ戦争の時代を体験し、戦後の貧しい時代そして豊かな時代を体験していることで、世の中を受け入れていくためにほどよい心のバランスが形成されたと思える(得)」など、貧しい時代と豊かな時代の両方を経験している点を肯定的に記述した者が6名いた。一方で、「将来年金で生活できるかどうかかわからない。今までたくさん年金を払ってきているのに保障してもらえないかもしれないから(損)」など、将来の不安に言及する者も12.7%いた。これらの傾向は「若者世代」の損得の理由においても同様に見られ、「満足の時代はピークがあれば確実にダウンする時代もあるはずである。よってこれからはダウンするから(損)」「高齢者社会となり税の負担も重くなるのではないか。就職難も続き、不況で給料もUPしないのでは・・・(損)」「今までは良かったけれど、就職難年金問題等とか様々なつけが来そうな世代かなと思う(どちらとも)」など、若者世代の現在までの恵まれた状況から将来の不安という「流れ」が含まれたコメントが25.0%見られた。

学生では、「親世代」については過去、しかもデメリットについての記述が7割の者に見られ、保護者(28.4%)に比べてかなり多い。この点が、先述した学生

の自己意見において「親世代は損」という意見が保護者に比べて多く、「得」という意見が少ないという結果と関連していると思われる。また、「親世代」の現在に関して述べる者は、「リストラなど損な面がいくつかあるから(損)」「まず貧しかった。それに、今の時代の流れに乗れない親を『ダメやなぁ』という自分が娘なのだから、かわいそうだ(損)」など、8.8%に留まった。さらに将来についての記述も少なく(3.8%)、あったとしても「文明の発達が遅れていたため生活が不快であった。教育を十分に受けられなかった。欲しい物が手に入りにくい。しかし残りの人生はこのまま安定であると思う(損)」「昔はそれなり苦勞をしたと思うが老後が保障されている(どちらとも)」など、将来の安定という記述に限られていた。また、自己の世代である「若者世代」についても現在についての記述が多く、「ある程度欲しい物は手に入れようと思えば手に入れることができ、自分の思うままに人生を決めていけるので(得)」など、現在のメリットを挙げる者が多い(78.8%)。なかでも学生が最も頻繁に言及していたのが、今の「ものの豊かさ」「便利さ」である。将来については、「生まれた時から経済的に安定。よって比較的自分の思った教育が受けられる。又、文明の発達で生活が快適。ほしい物が手に入りやすい。しかし高齢化社会、年金等の老後が心配(どちらとも)」など、不安材料への言及は5.9%に留まった。

これらの特徴を比較・統合してみると、ひとつには、保護者が描く社会の時間的変化には「上昇→ピーク→下降」というイメージがあると言える。これは自己の世代である「親世代」についても、「若者世代」についても適用されており、2世代の差とは、その時間的変化上における人生の開始時点と終了時点の差である(Fig. 2参照)。このようなイメージではトータルとして「親世代」と「若者世代」の損得には差が見られなくなる。また、FC効果により、これらの考え方が社会における一般の意見へと投影され、2世代の損得の差が比較的小さい分布が推定される。ただし、社会の上昇の中で「ゆと

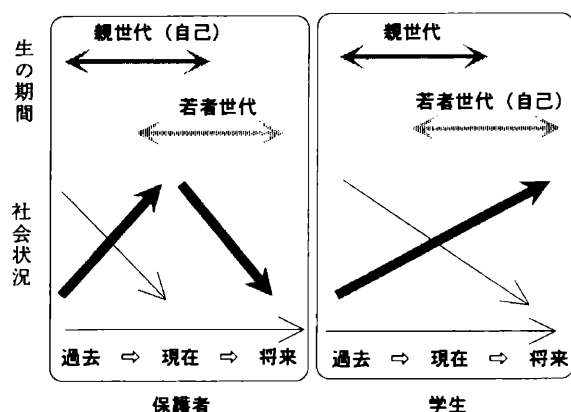


Fig. 2 「親世代」「若者世代」の損得評定の理由記述に見られる社会変化のイメージ

り「暖かさ」といった失われてきたものについても言及されており、「上昇」という主流の中で、「下降」してきた側面もあることは加味されている。

これに対して、学生の記述に見られるのは「親世代」の過去つまり親たちの若者時代におけるメリット・デメリットへの言及、あるいはそれらと現在の自分との比較というパターンといえる。また、保護者の中には「上昇→ピーク→下降」という社会変化のイメージが見られたが、学生ではほとんどの回答者において「貧しさから豊かさへ」という単調上昇が仮定されていると思われる。このような変化イメージの中では、当然「親世代」は「若者世代」より相対的に損となり、また、社会の成長がより進んだ中で生きてきている自分達は「恵まれている」と考えられているだろうという推測も成り立つ。ただし、ここでも、物質的豊かさと精神的豊かさのトレードオフという記述も多く、「下降」線も含まれているように思われる。

保護者の中にも「経済的豊かさ」や「高度成長」などについて言及する者は確かに多い(38.2%)。ただし、現在の豊かさについてだけでなく、「子供の頃から別に不自由なく育ってきて、就職も好景気時代の流れで有利に選べ、自分をあまり押さえることなくやってこれた(どちらとも)」「戦争を知らない。経済的に物質的にも豊かになってきた時代に生きている(得)」など、親自身がすでに豊かさの中で育ってきているという記述もある。さらに、先述のように、社会の物質的・経済的側面に言及している場合でも、「貧から豊」という成長のプロセスを経験したことが肯定的に受け止められている場合もある。つまり、学生が今と比較する限り「損であったら」と推測する時代についても、親自身はポジティブなものとして記述している場合もある。これらは、いずれも保護者と学生が示した自己意見における差異、さらには意見分布推定における差異と関連するであろう。

考 察

世代の損得というテーマに関して、「親世代」と「若者世代」における意見分布の推定を求めたところ、世代間での意見格差は認知されていないという結果となった。保護者自身には「親世代」も「若者世代」もそれぞれ損でもあり、得でもあると考える者が実際に多い。また、保護者は、自分の意見と同じ考え方の者が内集団である親世代にも、外集団である若者世代にも多いであろうと推測した。学生においても「親世代は損で若者世代は得」と考える者が多く、それが社会一般の意見であると推測された。ただし、異なる意見を自己意見として持っている者もいたが、そういう回答者は自分の意見と社会一般の意見とは異なるという認識を持っており、やはり一般の意見は「親世代は損で若者世代は得」だと推測している。

これは、徳田(1978)やAcock & Bengtson(1980)に見られた「世代格差」は子どもの認知でより顕著であるという結果とは異なる。ただし、世代格差認知もテーマによってその大きさは異なり、たとえば徳田(1978)で「下から」の世代間格差認知が大きかったのは、「漫画」「親への口答え」など、子供が親から絶えず注意を受け、「大人からの規制」を日常的に感じていた項目といえる。「下から」の世代間格差認知が大きくなる背景には、実際に上の世代との対立・葛藤の経験があり、そのような問題において格差が過大視されるのであり、世代間格差の認知は一種の対比効果(Sherif & Hovland, 1961)とも考えられる。しかし、実際の世代間対立・葛藤経験だけでなく、世代間コミュニケーションの質・量も断絶感に関与するであろう。たとえば道徳的問題や教育問題などに関して、年長世代が規範的あるいは建制的な論理により自らの真の経験や意見を隠蔽した場合、若者世代は格差感を抱きやすいかもしれない。また、若者世代にとって親世代が経験した時間のある部分(少なくとも自分の誕生日前)は全く経験のないものであり、それらについて年長世代が若者世代に何をいかに語るかによっても断絶感は異なるであろう。たとえば、年長世代が恋愛経験や遊びなど自らの若い時代について語ることで、若者世代は現在自らが経験していることとの類似性を感じ、断絶感が薄らぐということがあるかもしれない(あるいは逆の効果をもたらすかもしれない)。さらに、断絶感の認知は、社会において価値観が大きくあるいは急速に変化しているという社会的構築によってもたらされ、それにはマスコミによる情報が主要な役割を果たしているとも考えられる。どのようなテーマに関して、誰が、なぜ、世代間格差を過大に認識しやすいのか、また、そのように認識することによってどのような影響があるのかについて今後の検討が待たれる。

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

保護者と学生に見られた社会意見推定や自己意見に見られた差異は、世代の損得についての記述における差異と関連しているように思われた。Bosveld, Koomen, & Vogelaar (1997) は、社会問題の解釈素 (construal) が社会意見推定と推定者自身の意見の両者に関連しており、影響を与えているとする。解釈素とは、あるテーマやカテゴリーを考えたときに思い浮かぶ特徴のサンプルや具体例のセットを指す。FC効果とは、推定者自身の意見そのものが他者に共有されているという認知レベルで作用するものではなく、自分の解釈素が共有されているという認知レベルで作用するものである可能性を示唆している。本結果においても、各世代について思い浮かべる具体的経験や社会状況が推定や自己意見に影響した可能性も考えられる。

特に、白井 (1996) が歴史意識と呼ぶ、社会レベルとしての時間的展望の差異が世代の損得についての自己意見、社会意見推定における世代の差異と関連していると思われた。保護者が「下降していく」未来について言及しているのに対して、学生では「現代の豊かさ」に関する記述が多く、未来に言及する者が少ないという特徴が見られた。木下 (1996) は、未来時間の認知と年齢との関連を指摘している。中年期の人にとっては具体性を持ってイメージできる未来時間は30年あたりまでであるのに対して、青年は現在から10年先程度までであり、それ以上の未来のイベントは具体性をもてない。また、白井 (1993) は、今の若者は、刹那主義ではないが、現在を重視する傾向にあるとしている。本結果における学生の記述もこのような現在重視傾向の表れかもしれない。また、白井 (1996) は時間的展望の機能的要素の一つに「過去のとらわれからの自由」を挙げている。「過去をどうにもならないものとして諦めるのではなく、過去を受容することによって現在の自分の大切な一部として統合することができる (p. 383)」としている。本結果で保護者に見られた記述も、「貧しい時代」を現在の自己の中に取り入れ、これまでの人生を再構成しているといえよう。

時間的展望の差異は、自己意見、社会意見推定における世代の差異と関連していると思われたが、さらにそのような差異が世代間の相互作用にどのような影響を及ぼすのか、あるいは実際の相互作用から自己意見や社会意見認知がどのように変化していくのかについても検討を要するであろう。

最後に、損一得という判断について簡単に考察を加えたい。社会心理学では、たとえば衡平原理 (Adams, 1965) に典型的に見られるように、損一得という判断は当該対象同士の比較による相対的評価として定義されることが多い。また、時制に関しても、同じ時期における (intratemporal) 投資と結果の比較として暗黙のうちに

限定されていることが多い。しかし、本稿で明らかにされたように、損得に関する判断は、異なる時期における (intertemporal) 状態の比較や当該対象以外との比較など、問題とされている他者・他集団との社会的比較を越えたものに基づいている可能性がある。また、ある種の満足感を得るために下方比較を行う場合や、逆に自己の立場の劣悪さを主張するために上方比較を行う場合など、私たちは積極的に過去・現在・未来にわたり比較対象を探索・選択しているように思える。このような損一得判断の多様性への配慮や機能論的視点の導入はフェアネス研究のより一層の展開に貢献するであろう。さらに、相対的剝奪感は、単なる個人的感覚を越えて、社会において共有されている信念であるという認識があるときに社会的態度や行為にとって重要であるという指摘もあり (Smith & Gaskell, 1990)、相対的略奪と社会意見認知の統合もこの研究分野に新たな知見をもたらすと期待される。

引用文献

- Acock, A. C. & Bengtson, V. L. (1980) Socialization and attribution processes: Actual versus perceived similarity among parents and youth. *Journal of Marriage and the Family*, 42, 501-515.
- Adams, J. S. (1965) Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2 (pp. 267-299). NY: Academic Press.
- Bengtson, V. L. & Cutler, N. (1976) Generations and intergenerational relations: Perspectives on age groups and social change. In R. Binstock & E. Shanas (Eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences* (pp. 130-159). NY: Van Nostrand Reinhold.
- Bengtson, V. L. & Kuypers, J. A. (1971) Generational differences and the developmental stake. *Aging and Human Development*, 2, 249-260.
- Boldizar, J. P. & Messick, D. M. (1988) Intergroup fairness biases: Is ours the fairer sex? *Social Justice Research*, 2, 95-111.
- Bosveld, W., Koomen, W., & van der Pligt, J. (1994) Selective exposure and the false consensus effect: The availability of similar and dissimilar others. *British Journal of Social Psychology*, 33, 457-466.
- Bosveld, W., Koomen, W., & Vogelaar, R. (1997) Construing a social issue: Effects on

- attitudes and the false consensus effect. *British Journal of Social Psychology*, **36**, 263-272.
- Brewer, M. B. (1979) In-group bias in the minimal intergroup situation: A cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, **86**, 307-324.
- 古市裕一(1990) 成人期社会化の問題 齊藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化(pp. 233-249) 川島書店.
- 堀田美保(1996a) 「男であること」・「女であること」の有利性に関する内集団—外集団意見分布の推定 社会心理学研究, **12**, 77-85.
- 堀田美保(1996b) 男女の有利性に関する意見分布推定—内集団—外集団バイアスに対する呈示情報の効果 日本社会心理学会第37回大会発表論文集.
- 池田謙一・村田光二(1991) ころと社会—認知社会心理学への招待 東京大学出版会.
- 木下稔子(1996) 未来時間の文節 松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二(編著) 心理的時間—その広くて深いなぞ(pp. 394-404) 北大路書房.
- Krueger, J. (1992) On the overestimation of between-group differences. *European Review of Social Psychology*, **3**, 31-56.
- 栗原 彬(1989) やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス 新曜社.
- Marks, G. & Miller, N. (1987) Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, **102**, 72-90.
- 西平直喜(1976) 世代の断絶は埋められるか 藤原喜悦・西平直喜(編著) 青年の生活心理(pp. 9-41) 福村出版.
- 岡本祐子(1995) ライフサイクルとアイデンティティに関する研究 鑑幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) アイデンティティ研究の展望II(pp. 206-231) ナカニシヤ.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977) The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- Rothbart, M. & John, O. (1993) Intergroup relations and stereotype change: A social-cognitive analysis and some longitudinal findings. In P. M. Sniderman, P. E. Tetlock, & E. G. Carmines (Eds.), *Prejudice, politics, and American dream* (pp. 307-332). CA: Stanford University Press.
- Sherif, M. & Hovland, C. I. (1961) *Social judgment: Assimilation and contrast effects in communication and attitude change*. NH: Yale University Press.
- 白井利明(1993) 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要第IV部門, **42**, 51-57.
- 白井利明(1996) 時間的展望とは何か—概念と測定 松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二(編著) 心理的時間—その広くて深いなぞ(pp. 380-394) 北大路書房.
- Smith, P. & Gaskell, G. (1990) The social dimension in relative deprivation. In C. Fraser & G. Gaskell (Eds.), *The social psychological study of widespread beliefs* (pp. 179-191). NY: Oxford University Press.
- 祖父江孝男(1977) 文化と断絶—比較文化論的考察 大原健士郎(編) 現代人の断絶5 文化と断絶(pp. 106-121) 至文堂
- 徳田安俊(1978) 世代差の構造—現実の世代差と認知上の世代差 教育心理, **26**, 758-763.
- Troll, L. & Bengtson, V. L. (1978) Generations in the family. In W. Burr, R. Hill, I. Reiss, & I. Nye (Eds.), *Handbook of contemporary theory in family research* (pp. 126-161). NY: The Free Press.
- Walker, I. & Pettigrew, T. F. (1984) Relative deprivation theory: An overview and conceptual critique. *British Journal of Social Psychology*, **23**, 301-310.

(1998年3月10日受稿, 1999年3月23日掲載決定)

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

付 録

- 註1 各カテゴリーの典型を例としていくつか示した。
- 註2 各回答者の記述は複数のカテゴリーに属する可能性もある。下線部が各カテゴリーに含まれると判断された記述部分を示す。
- 註3 言及者比率が7.0%以下のものは「その他」としてまとめた。
- 註4 M=男性、F=女性；得=「得だと思う」、損=「損だと思う」、ど=「どちらともいえない」と略す。

| カテゴリー | 言及者比率 (%) |
|-------------------------------|---|
| ――保護者による「親世代」の損得評定理由 (102名)―― | |
| 高度成長期・ものの豊かさ | 38.2% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・戦後のベビーブームに生れ競争が厳しかった。現在でも職場でポスト採りに競争の渦中にある。しかし、同世代の友人も多く、<u>経済成長を我々が支えてきたという想いを強く抱いている</u> (M、ど) ・<u>子供の頃から別に不自由なく育ってきて、就職も好景気時代の流れで有利に選べ、自分をあまり押さえることなくやってこれた</u> (F、ど) ・<u>戦後の何も無い時代だったけれど成長する日本と一緒に大人になり頑張って生きた</u> (F、得) |
| 戦争・平和 | 24.5% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>戦争のための苦難、敗戦からの復興への苦闘、経済立国のための激務など</u> (M、損) ・<u>夫や子供を戦争に捕られていない平和。貧しさの時代を見て豊かな時代に生きている</u> (F、得) ・<u>私は戦後生まれなのでわりあい豊かな生活をしてきた。両親から戦争の話を良く聞いたが、とても大変なので</u> (F、得) |
| 団塊の世代・ベビーブーム | 18.6% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>戦後のベビーブームに生れ競争が厳しかった。現在でも職場でポスト採りに競争の渦中にある。しかし、同世代の友人も多く、経済成長を我々が支えてきたという想いを強く抱いている</u> (M、ど) ・<u>第一次ベビーブームと言われた世代で子どもの頃から寿し詰め教室に始まり、入試難、就職難等耳にして来た様に思えます。これから20年程したら今度は老人ホーム等行き先もなくなりそうになります</u> (F、損) |
| 自由・可能性 | 16.7% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>前項に書いた様に、親の職業によってなかなか自分の考えを(長男、次男に依って変わるが)通せない</u> (M、損) ・<u>今の学生のように自由がない</u> (F、損) ・<u>戦争もなく自分の生き方を親に左右される事もなく生きられ、これからも自分以外の人に人生を左右される事はない</u> (F、得) |
| 老後 | 14.7% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>親の世話し子供とは一緒に暮らせない。年金はおそらく少ない</u> (F、損) ・<u>私の世代の親の生活と比較すると、衣(医)食住全てに豊かになった。又健康保険・公約年金のお陰で親世代程、老後の心配がない。が、私世代の者が親に示した尊敬・愛情は子世代から得る事はむつかしいのは残念である</u> (F、ど) |
| こころの豊かさ・ゆとり | 8.8% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>子供の時代物不足でひもじく又つらく思った。物質的に豊かにはなったが自然とのふれあいや思いやりが失われ、振り返ると失ったものが余りにも大きい様に思われる</u> (F、ど) |
| 生活環境・自然 | 7.8% |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>自然がいっぱいあり走りまわってあそんだ。テレビゲームもビデオもなかった。楽しかった。しかし食糧不足でバナナが夢の世界であった。欲しいものも手に入れられなかった。どちらが良いかというむつかしい</u> (F、ど) |

社会心理学研究 第15巻第1号

その他

- ・ それほど学歴にしばられていなかったように思う (M、得)
- ・ 1.戦争等の体験 2.自然に育つ 3.男性優位の社会だった (M、得)
- ・ 年令的にも中間管理職であること。同年代人口が多い分だけ比較される事が多い。自由な時間を持つ事が出来ない (M、損)
- ・ 私自身はまだ若い人にも何とかついて行けるし、又年令の高い人達にも何とか合わせて行ける年代にある。また損な時も得な時も、経験している世代である (F、ど)

――学生による「親世代」の損得評定理由 (80名)――

もののなさ・生活の不便さ 42.5%

- ・ 文明の発達が遅れていたため生活が不快であった。教育を十分に受けられなかった。欲しいが手に入りにくい。しかし残りの人生はこのまま安定であると思う (M、損)
- ・ 日本に何も無い時代に育ったので、物がありがたみや、新しいものをつくりだす力をもっていると思うから (F、得)

自由・可能性 25.0%

- ・ 受験戦争などなかったが今の私達みたいに自由でもなかった。親がもっと厳しかったように思う (F、ど)
- ・ やりたい事とかやっていた気がする。例えば学生運動やヒッピーや長髪など (F、得)

達成感・活気 21.3%

- ・ 高度成長期に日本を築き上げた世代だから、ほこれると思うが、戦後すぐに生まれたので物質的には貧しかったと思うのでかわいそう (F、ど)
- ・ とにかく自由が少なかったと思います。でも私達よりも夢があったような気がします。特に60~70年代あたりは活気があったと思います (F、ど)

固定観念・しきたり 20.0%

- ・ 戦後で物質が不足し欲しい物も容易には手に入らなかったと思うから。また、昔からの慣例や風習が今以上に厳格であったと思うから (F、損)
- ・ 固定観念にしばられているから (F、損)

受験・進学 16.3%

- ・ 勉強したいと望んでも経済的理由で大学に行けなかった人が多いと思うから (F、損)
- ・ 子供の頃、自然の中で思いきり遊ぶことができた。高度成長期の中であつたが受験戦争も今程きびしくなく生活に時間のゆとりがあつた。でも今のように金銭にゆとりはなかった (F、ど)

戦争・戦後 10.0%

- ・ 物が少ない時代だし、幼くして空襲で亡くなった子もいるだろうから (M、損)
- ・ 戦争などがあつたり、不安定な時期であつたため。 (M、損)

自然環境 8.8%

- ・ 夢や希望があつた。環境が今のように汚染されていない (F、得)

その他

- ・ 現在と比べて色々な面で遅れていたと思うが、まだ今の世の中よりも荒んでいなかったと思うから (M、ど)
- ・ リストラなど損な面がいくつかあるから (M、損)
- ・ 同世代が多く、競争が激しいし、一番中途半端で、その前の世代より、あらゆる分野で生みだすものが少ない。停滞感を感ずる (M、損)

――保護者による「若者世代」の損得評定理由 (104名)――

ものの豊かさ 44.2%

堀田：若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定

- ・物質的に恵まれた世の中だから。自分の育った時代とはとに角、物の無い時代で、非常に苦勞した (M、得)
- ・物に恵まれすぎて、夢を見るのが少ない。時代の移り変わりが早すぎて、その中であたふたしているように思える。私の世代より短命だと思ふ (添加物入りの食品や薬のかかった食品ばかり食べている。スナック菓子も同然である) (F、損)

自由・可能性 26.9%

- ・やろうと思えば親の力や自分の力でやれると思ふ。無茶をしなければ、こうあるべきという事にしぼられず自分の力をためられると思ふ。(F、得)
- ・親の意志で子供は自由にさせているが世の中が彼らの自由をうばいすぎる。(M、ど)

こころの貧しさ 26.9%

- ・物には恵まれているけれども、人の情けとか人の関わりが何かギスギスしているみたいで自分さえ良ければいいというような世の中が心配です。(F、ど)
- ・豊かさの中で育って幸せではあるが、このままの社会だと将来どんなふうになっていくのか不安だから、しんぼうができないとか物や人を大切に作る心が育っていない人達の時代になりそう。(F、ど)

将来の不安・不透明性 26.0%

- ・変動の世の中、価値観、政治、経済の不安定など。目標を見つけるのが大変だと思うので、先行が大変だと思う。(M、損)
- ・未来に希望が持てない。これが一番気の毒だと思う。命の大切さ等、大切な事を教えられずに成長している。(F、損)

学歴主義・受験戦争 18.3%

- ・子供の頃から教育中心で偏差値社会の中で個性より成績中心の数字に振り回される時代に育ってきている。(F、損)
- ・自然の中で過ごす事が少なく、四季を味わうことも少なく勉強勉強といわれ育って表現力も乏しい。就職は超氷河期と雇用環境は大変厳しい時期である。(M、ど)

価値観の変化 14.4%

- ・価値観がくずれ、先が心配である。(F、損)

生活環境・自然 12.5%

- ・自然破壊、環境汚染等、又老人福祉、高齢化問題等、色々大変みたいだ。(F、損)

不況・就職難 11.5%

- ・政治・経済の混乱期(成長神話の崩壊)。(M、ど)
- ・高齢者社会となり税の負担も重くなるのではないかと。就職難も続き、不況で給料もUPしないのでは・・・。(F、損)

その他

- ・オープンに何でも話せるし、やりたい事は出来る状態です。親も子供のためにやりすぎ位やってしまうし、それをまた当たり前としている部分がある。幸せだと思う。(F、得)
- ・少子化で一人一人大切に育てられている。(F、得)
- ・ベビーブーム・受験難・就職難と一生懸命勉強しているのに大変だと思う反面、物にめぐまれたいくになれこれからの半生どの様になるか不安な思いです。(F、損)
- ・戦争を知らず国家再建の為の苦難苦闘を知らずして、自由の恩恵を受け、豊かな物質生活をうけている。(M、得)

――― 学生による「若者世代」の損得評定理由 (85名) ―――

ものの豊かさ・生活の快適さ 62.4%

- ・物質に恵まれ、欲しいと思う物がほとんどいつでも手に入れることができるから。(M、得)
- ・何もかもありすぎる事が何かを生みだそうとする時に邪魔になる。「何でもあり」みたいな世代の中は「何にもない」と感じる。(F、損)

自由・可能性 24.7%

- ・色々なことが自由になっていると思ふ。就職、恋愛、結婚など…。そういうところはいいと思ふ。ただ学歴社会なの

社会心理学研究 第15巻第1号

はイヤです。あと、物には恵まれているのではないのでしょうか (F、ど)

- ・ 選択すべきことが多すぎるが無いよりまし (M、ど)

受験・進学 22.4%

- ・ 受験等大変なこともあるが、物など豊かでめぐまれているし自由である (F、ど)
- ・ 物は必要以上にあるが友達の信頼が薄い。つまり、相手をけおとして進学してきたバカが多いから (M、ど)
- ・ 学歴が重視されなかった昔なら、今のように勉強したくないなどと思わなかっただろうが、今だからこそ、私のような人間が学生として許されるように思う (F、ど)

こころの貧しさ 21.2%

- ・ 例えば夫婦のあり方などは考え方が多様化してきて、昔よりは各々の自我を大切に生きていける時代になってきていると思う。自分の世代は損と思うのは、大学に入るための勉強に追われて、もっと大きい、生き方とかの問題を考えてきてない分、みんな人間的な深みに欠けるところがあるということです (F、ど)
- ・ 色んな自由に囲まれているから。たいていのことは思い通りにできると思う。さほど規則に縛られている気がしない。でも他人とのつながりを感じられない淋しさもあると思う (F、ど)

生活環境・社会問題 17.6%

- ・ 親の世代に比べて色々な価値感にしばられることが少なくなったと思うので、その点では得だが、現在特有の問題 (自然環境や女子高生の売春)もあるのでどちらともいえない (M、ど)
- ・ 今の世の中で便利になったとか豊かになったとか言われていることはほとんど全て両刃の剣である。工業が発達すれば環境が破壊され、経済が発展すれば拝金主義となり汚職が横行する。どちらがどうとはいえないのではないかと思う (F、ど)

価値観からの解放 11.8%

- ・ 親の世代に比べて色々な価値感にしばられることが少なくなったと思うので、その点では得だが、現在特有の問題 (自然環境や女子高生の売春)もあるのでどちらともいえない (M、ど)

不況・就職難 9.4%

- ・ 不景気で個人に対する能力の高さがものすごく求められていて大変 (F、損)
- ・ 就職するにしてもかなり厳しくなっているが、昔に比べて豊かになって、生活は良くなった (F、ど)
- ・ 今は不況といっているのによいとは思わないが冷静に社会を見れるのでその点は良いと思う。 (M、ど)

戦争・戦後 8.2%

- ・ 身近に紛争がなく、平和で、経済面で親に援助してもらっているから。昔のように学生が出兵しなくていいから (M、得)

その他

- ・ 親がわりと厳しい環境であっただろうため子供に対して甘い。生活、金回り、食物、衣服等 (F、非常に得)
- ・ コンピューターなど色々ありすぎて1人でやれることが多すぎて結局はやれねばならないことやれて当然。できるべきであることが多すぎて絶対負担が大きい (F、損)
- ・ 21世紀は混んとした時代だと思う。不安定と言えば損。自分達切り開いていけるといえば得 (F、ど)